



第2回日本ユマニチュード学会総会

抄録集

2020年9月26日(土) 14:00~16:00

オンライン開催

同時開催

公益財団法人生存科学研究所共催・市民公開講座

「福岡市から始まり広がる認知症フレンドリーシティ」

日本ユマニチュード学会
Japan Humankind Association

お問合せ

ユマニチュード学会事務局

E-mail : info@jhuma.org

財部 弘幸

福岡市消防局 警防部救急課 救急指導係長

『世界初！福岡市救急隊におけるユマニチュードの取り組み』

福岡市では認知症の方が住み慣れた地域で安心して暮らせるまちを目指す「認知症フレンドリーシティ・プロジェクト」を推進しており、この中心的な取り組みとして市民の方々に対するユマニチュードの普及に取り組んでいる。

そのような中、福岡市消防局では31隊262名の救急隊員が、年間81,447件（2019年中）の救急事案に出動しており、搬送した方の約53%が65歳以上の高齢者であった。日本における高齢化は今後も進展すると考えられており、これに伴って救急件数が更に増加するとともに、認知症の方の搬送も増えることが予想される。傷病者から得られる情報は適切な医療につなぐうえで非常に重要であり、認知症の方でもスムーズに治療を受けられるようにしたいと考え、2018年から世界で初めてとなる救急隊員向けのユマニチュード研修を開始し、今年で3回目を迎える。

今回は、取り組みの内容とともに過去2回の研修を、本田美和子氏（現「日本ユマニチュード学会」代表理事）らに、人工知能の映像解析による評価をしていただくことで見えてきたユマニチュードがもたらす救急隊員への効果について紹介する。

口頭発表

重度の口腔トラブルを抱えた認知症高齢者の「食事」支援

—他職種協働でユマニチュードを実践して—

発表者	田邊由美
所属	医療法人社団東山会調布東山病院 ユマニチュード推進室
共同演者	石井麻美
概要	<p>【はじめに】人間にとって「食事」は2つの大きな意味を持つ。栄養補給、そして生活の質としての意味である。今回、ケアに対する抵抗を認め、口唇を咬み重度の口唇潰瘍を形成した認知症高齢者事例を経験した。当事例に対し、多職種がユマニチュードを用いて実践した食事支援について報告する。</p> <p>【事例】A氏 80歳代女性、パーキンソン病、認知症、要介護4、在宅生活。覚醒レベルの変動はあるが簡単なコミュニケーションは成立。食事は自力摂取。</p> <p>【経過】肺炎のため当院入院。ケアに対し全身の筋緊張が亢進し、興奮と抵抗を認めた。更に、口唇を咬むことが続き口唇に潰瘍・瘻孔を形成。経口摂取量が低下し、ケアを再考した。A氏の様子を観察すると、先述のような症状は不安や不快刺激によって引き起こされていることが分かった。そこで病棟看護師、摂食嚥下障害認定看護師、言語聴覚士が協働してユマニチュードを用いてケア介入した。「見る」「話す」「触れる」の技術を用いてケアを行い、覚醒不良や抵抗時には、時間をおき改めて5ステップから関わった。また、本人が好きな歌をケアに取り入れた。これらを実践した結果、ケアの拒否は減少、状態は改善し退院した。しかし数日後に再入院、口唇潰瘍の増悪を認め、経口摂取の中止も検討された。しかし食事の中止はA氏の生活の質の低下を招くと考え、経口摂取を目標としケアを継続。結果、口唇潰瘍、食事摂取量共に改善した。【考察・結語】懸命にケアを届けようとするほど口唇の緊張亢進を招き、悪循環に陥るケースであった。ユマニチュードの技術を用いることで筋緊張の緩和を図り、また「強制ケアをしない」という哲学を重視した関りの積み重ねによって、本人の安心感と双方の良い関係性が築かれた。「食事」支援を通して栄養補給と生活の質の両面を支えることができたと考える。多職種が専門性を活かしつつユマニチュードを継続実践していくことが重要である。</p>

インストラクター資格取得から現在までの活動と今後の取り組み

発表者	石坂美千代
所属	特定医療法人研精会 介護老人保健施設 デンマークイン新宿 看護部
共同演者	栗田香織
概要	<p>2016年にインストラクターの資格を取得し法人内での研修が可能となった。</p> <p>自分の所属する施設に、まずはユマニチュードを知るということを目的に介護士、看護師、理学療法士を対象に入門コースの内容の研修を開始した。研修終了直後のアンケートではほぼ100%の職員が「ユマニチュードの技術を実施してみたい」「自分にとって役に立った」と回答しているが、研修後10ヶ月のアンケートでは23%の職員が一度も技術を実施したことがなく研修終了後の高いモチベーションを保ったまま実際のケアに活かすことができていなかった。①全員の研修が修了するまでの期間を可能な限り短くする②フロア施設内でリーダーシップを取る方と研修前から密に連絡を取り、どう進めていくかを決める③研修後に実際のケアと一緒に入り理解を深めていくことが必要ではないかと分かり2017年度の振り返りとした。</p> <p>2018年は研修終了後にフォローアップという形で日勤に参加した。フォローアップ時の内容が周知できるように報告書にまとめ検討事項として次回フォローアップ日までの課題が明確になるようにした。2019年からは研修が済んだ施設にはユマニチュードが浸透するという目的も加え4施設に対研修とフォローアップ日勤を実施してきた。この年の振り返りで施設を掛け持ちでフォローしていくことの困難さ、ユマニチュード浸透のためのリーダー育成が進まないことがあり本部の教育担当者に相談して次年度は関わる施設を絞り込んで集中的に行うことになる。2019年よりユマニチュード施設認証委員会のワーキングメンバーとして認証制度を深く学ぶことができユマニチュードを浸透させていくための仲間、環境づくり、哲学の大切さを学んだ。2020年7月に法人内の病院が移転し新しく認知症病棟ができることになり今までの教訓と施設認証で学んだことを生かした取り組みを始めることになっている。</p>

施設へのユマニチュード導入と展開における効果

発表者	染谷瞬
所属	SOMPO ケア株式会社 そんぼの家隅田公園
共同演者	玉川 千尋・岩瀬 美菜子
概要	<p>【背景】2018年度より弊社でユマニチュードの導入を検討。本事業所が実践ホームのひとつとなった。対象ユニット職員全員が4日間研修を受講。社内インストラクターにより新規職員も全員研修を受講している。</p> <p>【目的】ユマニチュードを通して職員のやりがいと入居者様が安心して過ごせる関係構築を図る。</p> <p>【対象】対象ユニットの職員とご入居者様48名</p> <p>【方法】対象ユニットにユマニチュード担当職員を設置、社内インストラクターと連携し下記方法にて取り組みを実施。継続したフィードバックができるしくみを作った。①「哲学・4つの柱・5つのステップ」に関する文言と写真を入れたポスターを掲示、文言を毎週のカンファレンスにて音読。②ケア動画を撮影しカンファレンスにて視聴、良い点を共有する。社内インストラクターも動画の評価を行い良い点やアドバイスを伝える。③定期的なアンケートを実施し自己分析や他者評価を行う。本人の了解を得て、個人情報の特定ができないよう倫理的配慮をしている。</p> <p>【結果】常にユマニチュードを意識してケアを行うようになった。動画の活用により自身を客観的に分析・評価できケアの統一ができた。他者からの評価を得ることで個々の自信になった。職員同士のポジティブな声掛けで、お互いに褒める文化ができた。</p> <p>【結論】上記の取り組みによりユマニチュードが定着し、ユニット全体の雰囲気も劇的に良くなった。個々が職業人としての誇りを持ち離職率も低下した。ユマニチュードを通して入居者様が安心できる関係構築ができ、施設がご入居者さまにとって自分の居場所となり穏やかに生活して頂けるようになった。</p> <p>【考察】ユマニチュードに取り組むにあたり難しいと感じたのは、モチベーションを保ち続けることであった。今回の取り組みにより職員に継続したフィードバックをし続ける事で、自己の現状の見える化ができユマニチュードの実践を継続する意識付けとなったのではないかと考える。</p>

大学病院におけるユマニチュード定着に向けた取り組み

発表者	上原佳代子
所属	東京医科歯科大学医学部附属病院
共同演者	内山 亜紀子
概要	<p>当院は高度先進医療を提供する大学病院で、2018年度より新規採用者に対してユマニチュードの研修を行っている。だが新規採用者の指導者がユマニチュードを理解していないと、ユマニチュードの促進や定着は図れないのではないかと考え、2019年度は指導者に対しても研修を行った。またその指導者に部署での中心となり、ユマニチュードを周知してもらいたいと考え、各部署で目標を立て取り組んでもらった。インストラクターは、毎日部署をラウンドし、対応に困った事例や質問などに応じた。約半年後の評価では、ユマニチュードを「活用できた」「活用できなかった」という意見はほぼ半数ずつであり、成果があまり感じられなかったという意見も多く聞かれた。活用できなかった指導者からの意見には「時間が無い」などが多くあり、“ユマニチュードは時間がかかるものだ”という思い込みが要因の一つだと考えられた。また、「対象の患者がいない」なども意見もあり、研修の方法として介護の現場の中でのユマニチュードの活用の説明が多かったため、急性期の患者が多い現場には則していないととられてしまったと考える。急性期の現場で対応に困っていることとして、苦痛を与えてしまう治療や検査、処置の場面が多い。そのような状況を想定した研修の方法を検討することが必要であると考え。またどのように評価してよいかわからないなどの意見もあり、何を成果指標として考えるかなど、具体的な案の提示なども必要なのではないかと考えた。</p>

電話相談実施報告～教えて介護の困りごと～

発表者	盛眞知子
所属	株式会社エクサウィザーズ AI ケア事業部
共同演者	丸藤 由紀・高澤 君子
概要	<p>新型コロナウイルス感染症対策は、いつも利用する在宅サービスが制限される事態も招き、認知症の方とご家族の日常は大きく変わった。自粛対策は、自宅で介護するご家族にとっても認知症の当事者にも初めてでありストレスとなったと思われる。認知症の方と円滑にコミュニケーションができて介護者家族の不安を軽減したいという目的で、株式会社エクサウィザーズでは、「在宅介護者支援プログラム」として、家族介護者をサポートするプログラムの提供を開始した。その第1弾となった無料電話相談は、福岡市の支援のもと4月29日から5月22日の平日にユマニチュード認定インストラクターが対応した。事前予約制としてWebまたはメールで申込、相談時間1回15分～30分間と設定した。12名のご利用があり、入院中で「面会できない」辛さや、トイレのトラブル、昼夜逆転、他さまざまに悩んでいる介護場面の相談であった。相談者は、相手を大切に想う愛情にあふれ、もっとよい介護をしたいという願いをお持ちであり、大変熱心であった。相談は傾聴に徹し、認知症ゆえの症状であると理解できること、困りごとの場面で使えるユマニチュードのケア技術を紹介すること、地域やケアマネジャーへつなぐ、社会的資源の活用をするという対応を行った。電話相談とは、電話を通しての一種の心理相談であり、一般的には面倒な手続きがなく気軽に無料で匿名性が守られる相談形態である。今回は相談者による予約と氏名を明らかにする形態で実施したが、予約制は相談者が相談内容を整理できる時間になったと思われること、1通話時に複数の家族が聴くことができるなど良い点もあった。また相談中にインストラクターと相談者が互いを名前で呼びあえて、親近感を持つことができた。おおむね感謝の言葉とユマニチュードの技術を介護場面でやってみたいという反応をいただき、短時間の電話相談でも、ご利用された家族介護者には安らぎとヒントとなったと思われる。</p>

家族のユマニチュード実践を支える訪問看護での取り組み

～易怒性の強い要介護者にユマニチュード技法を活用した一事例～

発表者	安藤夏子
所属	医療法人社団東山会調布東山病院 ユマニチュード推進室
概要	<p>はじめに</p> <p>要介護者の暴言暴力には介護者の誰しものが苦痛を感じるが、一日の大半を介護に費やす家族の負担は計り知れない。今回、要介護者の暴言暴力で在宅介護の限界を訴えていた家族にユマニチュード技法を伝えるアプローチを試みた。その2か月間の経過をここに報告する。</p> <p>症例の概要</p> <p>70代男性、脳梗塞後の左片麻痺と拘縮で生活全般に介護を要していた。暴言暴力を理由にショートステイの利用継続を断られ、同居中の妻、長女が24時間の介護を強いられる状況となった。「くそ女」などと言われ、殴る蹴る行為に妻の疲労が顕著となり、当院訪問看護師から介入依頼があった。</p> <p>家族指導の経過</p> <p>初回、臥位での清拭更衣時の暴言暴力から皮膚感覚刺激に非常に敏感とわかり、触れ方に技術を絞り指導した。2週目、視線を水平にするためケアは端坐位を選択、見る技術を追加。3週目、5つのステップのうち1、2を重点的に伝えた。4週目、体位調整にシーツの技術を伝授。5週目以降、実践の継続と技術定着に努め、7週目にはケア映像を撮影し振り返りに活用。9週目、家族と訪問看護師のみでの実践を見守った。</p> <p>結果</p> <p>家族からのヒアリングをもとに阿部式簡易 BPSD スコアで本人の症状を評価した¹⁾。介入前10点だったスコアが、7日目4点、1か月後2点に減少し、2か月後も継続していた。それに伴い、介護方法の工夫や、眠気が強いと抵抗があるなど反応の考察も生まれ、「介護は限界」から「どうにかなりそう」と妻の言動も変化した。</p> <p>考察</p> <p>ユマニチュード技法は家族の介護負担減に有効であった。しかし、介護負担が著明な家族の実践を支えるには、必要な技術を適切なタイミングで伝えることや、許容範囲を見極めた情報量の調整、定期的な振り返りなど長期的なアプローチが必要で、人材や資源の確保が課題である。</p> <p>参考文献 1)阿部康二:新しい BPSD スコアの有用性. 老年期認知症研,19(8),118-120,2014</p>

自閉スペクトラム症児の母子相互作用に関する探索的検証(1)－マルチモーダル分析手法の提案－

発表者	長岡千賀
所属	追手門学院大学
共同演者	松島 佳苗・吉川 左紀子・加藤 寿宏・中澤 篤志・本田 美和子・イヴ ジネスト・安藤 夏子・岩元 美由紀
概要	<p>自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下, ASD) 児と母親のコミュニケーション支援の実現に向け, 母子間相互作用を適切に評価するための手法を開発することが本研究の目的である。</p> <p>5歳9ヶ月のASD男児Aくんとその母親の(介入前)自由遊びの様子をビデオ撮影し, 続いてその母親に, 養育場面に合わせて改定されたユマニチュード講習を行なった。その約3週間後に, 中間フィードバックと自由遊びの収録を実施した。フィードバックでは, その母子の以前の自由遊びの動画を母親に見せながら, ユマニチュードの観点から問題点や解決策をアドバイスした。この6週間後に, 最終フィードバックと(介入後)自由遊びの収録を行なった。介入前と介入後の自由遊びを比較した。</p> <p>自由遊びの動画を, 15秒間隔に区切り, 開始から8分間の32区間のうち, 奇数番号の区間を分析対象区間とした(合計4分間)。動画を見ながら, 一方が他方に何らかの反応を求めて行なわれた働きかけと, それに対する反応を認定した。それぞれの働きかけや反応が, どのようなモダリティの組み合わせで行われているかを, (1)体(より厳密には, 胸部前面)の向き, (2)顔向き, (3)声, (4)手などでの接触, (5)物を介した関わり, の5つの観点からコード化した。子の働きかけや反応については(6)情動もコード化した。</p> <p>結果は, 母親とAくんともに働きかけ回数が, 介入前から増加したことを示した。また, この事例の母親は, 介入前には体と顔と声を伴う関わりが多かったが, 介入後には体と顔と声と手を用いた関わりが最も多くなった。そして, Aくんは, 体・顔・声・手を使った関わりを, 介入前にはしなかったが介入後には相対的に多く行なったことが示された。以上のことから, 本研究で開発した分析手法は, 相互作用の活発さや, 用いられるモダリティの豊かさを検討することを可能にし, 介入前後を比較するのに有効な手法であると考えられる。</p>
発表	電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会・2020年度

自閉スペクトラム症児の母子相互作用に関する探索的検証(2)

－就学前の自閉スペクトラム症の事例報告－

発表者	松島佳苗
所属	関西医科大学
共同演者	長岡 千賀・加藤 寿宏・吉川 左紀子・中澤 篤志・本田 美和子・イヴ ジネスト・安藤 夏子・岩元 美由紀
概要	<p>自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder; 以下, ASD) は、社会的コミュニケーション・対人的相互反応の欠陥と行動、興味、または活動の限定された反復の様式をその中核的障害としている。本研究では、ASD 児と母親の対人的な相互作用に着目し、一事例を通して介入前後でみられる変化を分析した。A くん (5 歳 9 カ月, 男児) は、重度精神遅滞を併存しており、発声はみられるが、言語によるコミュニケーションは困難であった。</p> <p>方法として、ユマニチュードの講習会とビデオフィードバックによる介入が行われ、その前後に撮影した母子の自由遊びの動画を比較分析した。動画の分析は、「A くん働きかけ」と「母の反応」、「母の働きかけ」と「A くん反応」について、マルチモーダルな分析手法を用いて実施した。</p> <p>結果、A くん働きかけの総数は介入後に増加を示し (介入前: 4 回, 介入後: 13 回)、特に接触を伴うマルチモーダルな働きかけが多くなった。そして、介入前にはほとんど見られなかった母親の A くんに対する反応が、介入後では多様な反応として複数回観察された (介入前: 1 回, 介入後: 12 回)。母親の働きかけと A くん反応に関しても、接触を伴うマルチモーダルな関りが介入後に増加した。さらに、介入後は、快・不快といった情動を伴う A くん働きかけも増加を示した。</p> <p>本事例は、重度精神遅滞を併存しており、母親が児の反応を知覚し、正しく読み取ることやマルチモーダルなコミュニケーションが、特に重視される社会性の発達段階にあった。そのため、介入後に母親が A くん働きかけに気づき、それに応じた反応を示すようになったことで、相互の関りに変化が生じた可能性が考えられる。また、介入方法としてビデオフィードバックを用いたことで、子どもとの関りを客観的に振り返る機会を母親に提供できたことも、本事例の母子相互作用の変化を引き起こした要因の 1 つであると考えられる。</p>
発表	電子情報通信学会 ヒューマンコミュニケーション基礎(HCS)研究会・2020 年度

以上